

平成 2 0 年度病虫害発生予報第 1 号

平成 2 0 年 4 月 3 日
鳥取県病虫害防除所

予報の概要 [参考]

区 分	農 作 物 名	病 害 虫 名	発 生 時 期	予 想 発 生 量
普通作物	イ ネ	苗立枯病	-	平 年 並
	オ オ ム ギ	赤かび病 うどんこ病 網斑病	平 年 並 早 い -	平 年 並 多 い やや多い
果 樹	ナ シ	黒斑病	平 年 並	平 年 並
		黒星病	平 年 並	平 年 並
		赤星病	平 年 並	平 年 並
		ハダニ類	平 年 並	平 年 並
		カメムシ類	平 年 並	平 年 並
野 菜	ラ ッ キ ョ ウ	灰色かび病	平 年 並	平 年 並
	スイカ、メロン、 タバコ	アブラムシ類	平 年 並	平 年 並

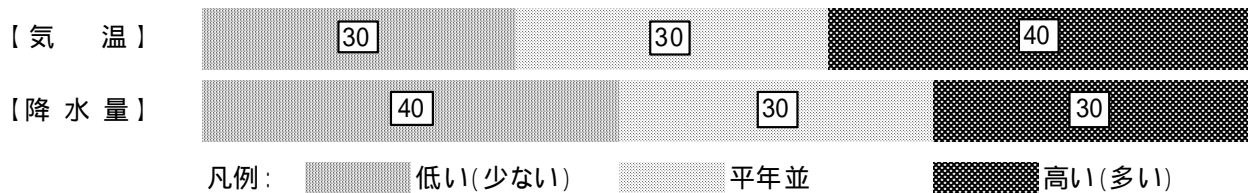
気象予報（抜粋）

1 か月予報（3月29日～4月28日：3月28日、広島地方气象台発表）

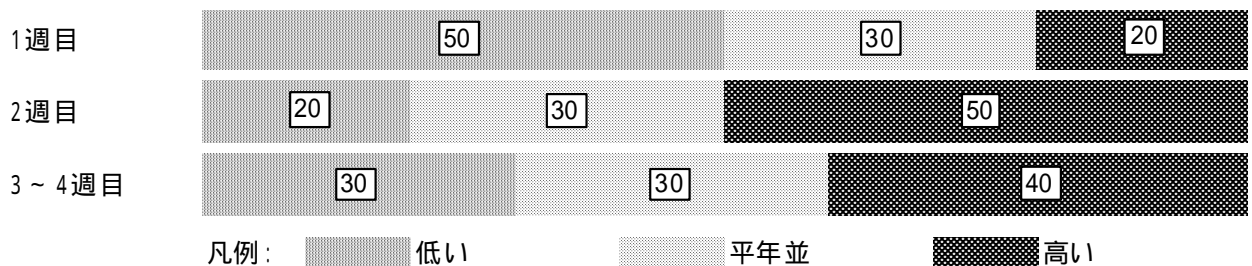
向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天気は数日の周期で変わるでしょう。週別の気温は、1週目は低い確率50%、2週目は高い確率50%です。

< 向こう1か月の気温、降水量の各階級の確率 (%) >



< 気温経過の各階級の確率 (%) >



普通作物

[イ ネ]

1 苗立枯病

(1) 予報の内容

発生地域 県下全域
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気象予報から発生量は平年並と予想される。
- イ 苗立枯病の予防防除が広く普及している。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 発病後の防除は困難であるため、予防防除を徹底する。
- イ 育苗環境を清潔に保ち、育苗中の温度管理及び水管理に注意する。
- ウ ムレ苗が発生した場合には、タチガレエース液剤の500～1,000倍液又はタチガレン液剤の500～1,000倍液を箱当たり0.5リットルかん注し、夜間の保温と昼間の遮光に努め、苗の回復を図る。移植可能であれば、早めに本田に移植する。

[ム ギ(オオムギ)]

1 赤かび病

(1) 予報の内容

発生地域 県下全域
発生時期 平年並
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

- ア 二条オオムギ、六条オオムギとも出穂期は平年並と予想されている。
- イ 向こう1か月の気象予報から発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 六条オオムギは二条オオムギに比べて本病が発生しやすいので、注意する。
- イ 発病後の防除は困難であるため、麦栽培指導指針などを参考にして薬剤による予防防除を行う。防除適期は、二条オオムギでは穂揃い期の10日後、六条オオムギでは穂揃い期及びその7～10日後である。

2 うどんこ病

(1) 予報の内容

発生地域 県下全域
発生時期 早 い
発生量 多 い

(2) 予報の根拠

- ア 3月18日現在、発生ほ場率は77.8%で、4月上旬の平年値(13.8%)を既に上回っている。
- イ ムギの茎数は平年に比べてやや多く推移している(二条オオムギ)。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 葉色が濃い過繁茂のほ場では多発の恐れがあるので注意する。
- イ 麦栽培指導指針などを参考にして薬剤による防除を行う。

3 網斑病

(1) 予報の内容

発生地域 県下全域
発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

- ア 3月18日現在、発生ほ場率は77.8%で、4月上旬の平年値(60.6%)を既に上回っている。
- イ ムギの茎数は平年に比べてやや多く推移している(二条オオムギ)。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 葉色が濃い過繁茂のほ場では多発の恐れがあるので注意する。
- イ 麦栽培指導指針などを参考にして薬剤による防除を行う。
- ウ 本病は種子伝染するため、発病ほ場から採種しない。

果 樹

[ナ シ]

1 黒斑病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

- ア ナシ園における越冬菌密度調査の結果によると、側枝上の枝病斑数、腋芽の病芽率はそれぞれ0.1%(平年:0.3%)、9.1%(平年:16.0%)であり、平年を下回ったが、短果枝の病芽率は3.9%(平年:2.1%)であり、平年を上回った。
- イ 向こう1か月の気象条件によると、発生時期及び発生量は平年並と見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 開花前~人工交配終了後に、伝染源となる病芽の除去を徹底する。
- イ 開花期に病原菌が雌しべに侵入することがあるので、開花前~人工交配直後の薬剤防除を徹底する。
- ウ 薬剤は開花始めにジアリン水和剤600倍液又はジラム・チウラムフロアブル(ダイボルトフロアブル又はパルノックスフロアブル)500倍液、人工交配終了後にフロンサイドSC2,000倍液又はベルクガード水和剤500倍液、落花期に有機銅フロアブル(キノンドーフロアブル又はドキリンフロアブル)1,000倍液を散布する。

2 黒星病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 県内巡回調査園(幸水及び豊水)における病芽率は0.9%(平年:1.5%)で、越冬菌密度は平年を下回った。

イ 越冬伝染源からの胞子の飛散は3月下旬から始まっており、飛散開始時期はほぼ平年並であった。

ウ 向こう1か月の気象条件によると、発生時期及び発生量は平年並と見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア りん片の脱落の悪い腋花芽は芽基部病斑を形成しやすく、本病の伝染源となるので、これらを開花始め～落花期に見回って切り取っておく。

イ 開花期に降雨が続くと多発しやすいので、開花前～落花期の防除を徹底する。

ウ 薬剤は、開花始めにアンビルフロアブル1,500倍液、落花期にE B I水和剤(スコア顆粒水和剤又はマネージ水和剤)4,000倍とジラム・チウラムフロアブル(ダイボルトフロアブル又はパルノックスフロアブル)500倍の混用液を散布する。

3 赤星病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 県予察ほ場のビヤクシン上における冬胞子堆の形成量はほぼ平年並であった。

イ 4月1日現在、伝染源となるビヤクシン上の冬胞子堆の膨潤は確認されていない。

ウ 近年、住宅の生け垣などにビヤクシン類が多く使われているため、住宅地に近いナシ園では本病の発生がやや目立っている。

エ 向こう1か月の気象予報によると、発生時期及び発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア ビヤクシン類が果樹園に近く、4月中～下旬に雨が多い場合、発病しやすくなるので注意する。

イ 冬胞子堆の膨潤と小生子の飛散最盛期は、例年、満開前後の降雨直後となるので、この時期の防除を徹底する。

ウ 薬剤は開花始めにアンビルフロアブル1,500倍液、落花期にE B I水和剤(スコア顆粒水和剤又はマネージ水和剤)4,000倍とジラム・チウラムフロアブル(ダイボルトフロアブル又はパルノックスフロアブル)500倍液の混用液を散布する。

エ 5月以降に葉の発病がみられる時には、E B I剤(スコア顆粒水和剤4,000倍液、マネージ水和剤4,000倍液、アンビルフロアブル1,500倍液など)を追加散布する。

4 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 県内巡回調査園における、クワオオハダニの越冬卵数は短果枝あたり2.0個(平年:1.7個)で平年並であった。

イ 向こう1か月の気象予報によると、発生時期は平年並と見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 蕾や葉に発生が認められた場合は、開花始めまでにカネマイトフロアブル1,500倍液を単用散布する。

イ ハダニの発生が多く認められる園では、薬液が葉裏によくかかるように丁寧に散布する。

ウ 一部のほ場では、クワオオハダニの越冬卵が多数認められている。そのようなほ場では、越冬期防除を実施している場合でも観察を怠らないようにする。

なお、観察時期は、本種越冬卵のふ化初め～最盛期の4月第4～5半旬(平年)を目安とする。

5 カメムシ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア クサギカメムシの越冬成虫数(簡易小屋トラップ)は、トラップ当たり4.4頭(平年:8.8頭)とやや少なかった。一方、チャバネアオカメムシは越冬世代にあたる前年8～9月の予察灯の誘殺数が多かったことから、越冬量はやや多いものと予想される。

イ ナシの開花時期は平年並～やや早いと予想されており、春季におけるナシ園への成虫の飛来時期は、ほぼ平年並の4月中旬～5月上旬頃が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 山間地及び民家近くの果樹園で例年発生が認められる園では、春期の被害が予想されるため、成虫の飛来を注意して観察する。

イ ナシ園への飛来が認められた場合は、直ちにジノテフラン水溶剤(アルバリオン又はスタークル顆粒水溶剤)2,000倍液などを追加散布する。

野 菜

[ラッキョウ]

1 灰色かび病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

- ア 本病の初発生時期は、ほぼ平年並の3月中～下旬であった。
- イ 3月下旬の現地巡回調査による本病の発生量はほぼ平年並であった。
- ウ 本病は4月の気温が高く、5月に低温多雨の条件で発病が増加しやすい。向こう1か月の気象予報によると、発生量はほぼ平年並と見込まれる。
- エ 現時点の本病の症状は、葉先枯れ及び葉身中位部の白色斑点症状がみられる初期症状であるが、今後、被害枯死葉上に分生胞子の形成がみられるようになる。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 防除間隔が空きすぎないように注意し、4月下旬まで以下の薬剤を輪番に散布する。薬剤はフロンサイド水和剤2,000倍、ダコニール1000の1,000倍液、ロブラール水和剤1,000倍液、カンタスドライフロアブル1,500倍液などを使用する。
- イ 降雨後には、枯れた葉上に多数の分生胞子を形成するので、降雨後の防除を徹底する。
- ウ 窒素肥料の過多などによって茎葉が過繁茂となったラッキョウは、株元に薬液がかかりにくい状態となっているので、丁寧に散布する。

[スイカ、メロン、タバコ]

1 アブラムシ類

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

- ア 県予察ほ場（東伯郡北栄町、露地ほ場）における黄色水盤への有翅虫の初飛来は、4月1日現在確認されていない。
- イ 向こう1か月の気象予報によると、発生時期及び発生量は平年並が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア ハウスの換気部分や出入口には寒冷紗被覆を行い、アブラムシ類の侵入防止に努める。
- イ 葉裏を注意して観察し、初期防除を徹底する。
- ウ スイカにおいて、ハウス栽培では交配前にミツバチへの影響のないチェス水和剤3,000倍液を散布する。トンネル栽培ではつる引き誘引時期に、チェス水和剤3,000倍液を、交配前にバリアード顆粒水和剤2,000～4,000倍液を散布する。
メロンでは、チェス水和剤2,000～3,000倍液、バリアード顆粒水和剤4,000倍、DDVP乳剤（ホスピット乳剤、DDVP乳剤50など）1,000～2,000倍液、モスピラン水溶剤8,000倍液などを散布する。
- エ タバコの近隣にジャガイモを栽培している場合は、タバコ黄斑えそ病の伝染源となるので掘り残しイモをすべて除去する。また、ジャガイモやタバコを透明寒冷紗などにより被覆栽培するなどして本病の伝染を防ぐ。

[おしらせ]

農薬は、農林水産省の登録番号のあるものを、ラベルをよく読んで使いましょう。
詳しい内容は、独立行政法人 農林水産消費安全技術センターの「農薬登録情報検索システム」から検索できます（<http://www.famic.go.jp/>）。

農薬の使用に当たっては、農薬使用基準を遵守しましょう。

周辺への飛散には充分注意しましょう。

< 鳥取県病虫害防除所ホームページ >

アドレス <http://www.jppn.ne.jp/tottori/>

病虫害発生予察情報、現地巡回調査結果などの指導情報、病虫害の診断方法などの情報をお知らせしていますので、ご利用下さい。

鳥取県病虫害防除所

〒680-1142 鳥取市橋本 260

TEL : 0857-53-1345、FAX : 0857-53-5647

E-mail : boujyot@titan.ocn.ne.jp

次回の予報発表は、平成20年4月24日（木）の予定です。